



主要諸元：(20S L Package 4WD 6AT)

- 全長×全幅×全高／4,395×1,795×1,540mm
- ホイールベース／2,655mm
- トレッド／前：1,565mm 後：1,565mm
- 車両重量／1,480kg
- 最小回転半径／5.3m
- エンジン／1,997cc 直列4気筒DOHC16バルブ
- 最高出力／156ps : 6,000rpm
- 最大トルク／20.3kgf・m : 4,000rpm
- WLTCモード燃費／14.8km/ℓ
- ミッション／6速AT
- ブレーキ／前：ベンチレーテッドディスク
後：ディスク
- タイヤサイズ／215/55R18
- 駆動方式／4WD
- 乗車定員／5名
- 車両本体価格／3,030,500円(税込)

めて洗練された美しいデザインを持つ。なにかと話題に事欠かない最近のマツダ車。お借りしたCX-30の外装色はポリメタルグレーで、一般社団法人日本流行色協会主催の「オートカラーアワード2019」において、内装色バー「ガンディ」との組合せ(マツダ3ファストバック)、内装色ネイビーブルー／グレージュとの組合せ(CX-30)がグランプリを受賞している。陽があるとシルバー／ライトブルー、日陰では濃いグレーに見え、曲面の造形によく似合う。そしてボディ下部の黒い樹脂部分を広くとることでSUVとしてのたくましさを表現するとともに、外観全体を薄くスポーティに見せることにも成功している。写真では分かりにくいかが、ヘッドライトやリアコンビネーションランプは非常に立体感のある造形になっており、現車をまじまじと見ると「手が込んでいるな」と感じる。

また全高は1,540mmに抑えられており、立体駐車場の利用も考慮されている。全高1,550mm以下入庫可能としている駐車場が多いからだ。冬場の雪下ろしや窓ガラスの凍結などを考慮すると、立体駐車場に駐車できるアドバンテージは大きい。

さらにフランジシャータイプのLEDウインカーが増えている中、余韻を残して点滅するタイミングターンシグナルを探

基本設計から細部まで、徹底的にこだわったデザイン

「プロフィール

魂動デザインを纏う、美しいクロスオーバー

マツダCX-30は昨年10月末から販売が開始されたCX-3とCX-5／8の中間に位置する新型車。昨年5月に誕生

一つ一つのこだわりが、クルマへの愛着を高める マツダクオリティ

用。まるで生き物のような光り方であり、こうした部分にまでこだわる姿勢に拍手を送りたくなる。

マツダの現行ラインアップは、乗用タップがマツダ2／3／6／ロードスター。クロスオーバータップがCX-3／CX-30／CX-5／CX-8となっており、関係がややこしいが、CX-3／CX-5とCX-30のサイズ・価格を比較すると、CX-30は全長が150mm、全幅が30mm長い一方、全高は10mm低い。CX-5対比では全長が150mm、全幅が45mm短く、全高は150mm低い。「CX-3では若干小さいけれど、CX-5では大きい」というヤングファミリー層にぴったりの絶妙な位置にある。

ところで現行のマツダ車はロードスターを除けば、どの車種もフロントデザインが良く似ている。これはメーカーのアイデンティティを明確に打ち出すためのアミリーフェイスという手法で、BMWのキドニーグリルやジープのセブンスロットグリル、メルセデスのスリーポインテッドスターなどが挙げられる。国産車においてもレクサスのスピンドルグリル、ニッサンのVモーショングリルなどがあるが、マツダのそれはひときわ主張が強い。これは2010年からスタートした魂動(こうどう)デザインコンセプトによるもの。「車は単なる鉄の塊ではなく、命あるもの」と言い切るそのデザインには大きな説得力があり、マツダ3やマツダ6の美しいプロポーションには目をみはるものがある。その流れから生まれたCX-30は、極



美しさと楽しさを追求する マツダの新しいクロスオーバーSUV **MAZDA CX-30**

■テキスト=横山聰史(Lucky Wagon) ■Photo=川村勲(川村写真事務所)
■取材協力=北海道マツダ琴似店 Tel(011)611-7116

したマツダ3をベースとしており、スタイルがリッシュかつスポーティなクロスオーバー車である。



ディーラーメッセージ

北海道マツダ 琴似店

販売係長

雲龍 達也さん



クーペのように美しいデザイン、取り回ししやすい適度なサイズと広い室内、先進の各種安全装備と走行安定性。そしてマツダらしい「走る楽しさ」を詰め込んだ最新のクロスオーバーSUVがCX-30です。運動性能と静肅性も高く、毎日のお買い物からファミリーでのロングドライブまで、幅広く対応可能な一台です。ぜひご試乗の上、その魅力をご体験ください。道内4つめの新世代店舗として生まれかわった琴似店、広く清潔な環境でお待ちいたしております。



走り出してみて驚いたのは、2リッターガソリンエンジンの軽快さと扱いやすさ。最高出力156ps／最大トルク20.3kgmと数値上は凡庸だが、体感上はもつとスポーティだ。街中での出足に不満を感じる場面はなく、むしろ気持ち良いと感じる範囲で踏んでいくと、気づけば車群をリードしている。ディーゼルターボより低中域のトルク感はないが、その分、回転で補ってくれるイメージだ。

そしてコーナーに差し掛かると、GVC（G-ベクタリングコントロール）plusによって、曲がりやすく安定したマナーを体験できる。GVCとはコーナー進入の際、トルクを制御すると同時に外側の前輪に荷重をかけて応答性を向上させ、コーナリング中は外側の前後輪に荷重をかけて安定性を、立ち上がりでは復元モーメント（元の状態に戻ろうとする力）を付与することで安定性を生み出す機能。文字にすると非常に難解だが、実際にコーナーを走ってみると「オーバーステア気味かな?」と感じさせつつ、スマートに安定したまま抜けていくイメージである。もっとシンプルに言えば、自分が上手くなつたと錯覚するようなコーナリングマナーということになる。足回りは少し固めかなと思われるが、キビキビ

走り出してみて驚いたのは、2リッターガソリンエンジンの軽快さと扱いやすさ。最高出力156ps／最大トルク20.3kgmと数値上は凡庸だが、体感上はもつとスポーティだ。街中での出足に不満を感じる場面はなく、むしろ気持ち良いと感じる範囲で踏んでいくと、気づけば車群をリードしている。ディーゼルターボより低中域のトルク感はないが、その分、回転で補ってくれるイメージだ。

新世代クロスオーバー 総合力の高い、インプレッション

車内は適度なサイズ感。前席はタイトな印象もあり、運転好きな方はすぐに馴染むだろう。後席は大人一人で余裕たっぷり。お子さんなら3名でも余裕だ。頭上には身長170cmのレポーターが座つて拳2つ分のスペースがあり、開放感を生んでいる。ターゲットであるヤングファミリーにとって、最適なチョイスとなりそうだ。

「人馬一体」……これはマツダが長く掲げているクルマづくりのテーマ。どんなクルマも運転が楽しいこと、そしてそれを追求することで安全性や安定性の向上にもつながっていくこと。もちろんこの考え方はCX-30にもたつぶりと注ぎ込まれ、なんとも総合力の高いクロスオーバーに仕上がった。マツダのこうした姿勢の中には、純粋なクルマ好きの心があ

いる。なんと全車標準装備のGVC plusと相まって、コーナリングも楽しめる唯一気がかりなのは左後方の視界。ただしそれを補つて余りある安全装備が多々用意されている。視界に関する全車標準装備ではブラインドスポットモニタリング機能、後側方接近車両検知機能、リバーキングセンサーなど。メーカーオプションでは360°ビューモニターも設定されているので、ぜひとも活用したい機能だ。